

小学生の服装にみる洋装化—八王子における産業形態を中心として—

○末久真理子\*・酒井哲也\*・酒井豊子\*\*

(\*共立女子大学・\*\*放送大学)

<目的> 1997年家政学会で報告した小学生の服装に見る洋装化では、絹産業の重要な拠点の一つであった高崎・前橋地域また、八王子地域を調査した結果を示してきた。その結果、同じ絹産業基盤で栄えたはずの高崎、八王子の洋装化に違いが見られた。本研究では、前報告に引き続き高崎・八王子地域について実証的に調査し、特に両地の産業形態に注目して、さらに検討してゆく。

<方法> ある時代の様子を推定させる指標として、当時の写真、特に地域的、経年的変化を見るのに適当な卒業記念写真からのデータを用い、まず、洋服・和服の着用割合を調査した。ついで、それらのデータと関連する種々の文献をできるだけ広範に収集するよう努めた。調査地域は、明治政府の産業立国政策下における絹産業に重要な拠点の一つであった高崎・前橋に加え、特に、幕末から明治後期まで生糸の運搬に利用された「絹の道」の要として栄え、生糸の集散地でもあった八王子地域を対象とした。

<結果> 高崎、前橋、及び八王子地区においてそれぞれ町の中心地に近い小学校を調査した結果によれば、高崎の中央小学校が最も早く次いで前橋の桃井小学校、八王子の第一小学校の場合はかなり遅いことが分かった。一方、いずれの町もほぼ同じ頃、絹に関係して経済発展の著しかった地域だが、産業形態は大きく異なることが推論された。すなわち、高崎は周辺の養蚕地帯の中心として機能する流通・商業の町、前橋は養蚕地帯からの繭を収集し、生糸に繰り上げる製糸工業の町、そして八王子は織物工業の町として周辺農村を支配していたようで、これらの性格の違いが洋装の受容にも違いを生じたものと考えた。